

老いと死と救い

大 塚 稔

Aging, Death and Peace

Minoru OTSUKA

I 高齢者の不安

ご承知のことかと思いますが、平成7年に「高齢社会対策基本法」が制定されました。その前文には「今後、長寿を全ての国民が喜びの中で迎え、高齢者が安心して暮らすことのできる社会の形成が望まれる」としながらも、「我が国の人口構造の高齢化は極めて急速進んでおり、遠からず世界に例をみない水準の高齢社会が到来するものと見込まれているが、高齢化の進展の速度に比べて国民の意識や社会のシステムの対応は遅れている。早急に対応すべき課題は多岐にわたるが、残されている時間は極めて少ない」という悲痛な言葉が記されています。

なぜこれほど切迫しているのか言いますと、平成9年9月15日現在、65歳以上の人口は、1,973万人で、総人口の15.6%を占めていること、更に深刻なのは、そのパーセントの高さではなく、むしろその速さにあります。つまり7%から14%になるまでの所要年数を見ますと、スウェーデンが85年、イギリスが46年、フランスが116年もかかったのに対し、日本はわずか24年でその数値に達しております。これこそが緊急を要する問題なのです。しかも今後ますますその割合は加速され、2020年には、26.9%になると予測されております。まさに稀に見る高齢社会の到来です。幸いここに来られている方々は健康に恵まれ、充実した日々を送ってこられているようですが、西暦2000年には、痴呆を含む寝たきり高齢者120万人、介護を必要とする痴呆症高齢者20万人、生活に介護を必要とする虚弱高齢者130万人になるという統計も出ております。

またこのような高齢者の生活様態を見ます（平成9年の総務庁資料）と、高齢者のみの世帯が36.1パーセント。単身高齢者のみが12.1パーセントもおられます。平成7年の宮崎県の人口動態では、65歳以上の人口に占める高齢者のみの世帯の割合は鹿児島に次いで高く46.6パーセント（平成7年の国勢調査資料）で第2位。約半数が高齢者夫婦だけで生活していることになります。また高齢単身者のみの割合も15.5パーセントで第5位にあります。高齢者にとって決していい環境とは言えない状況です。

高齢者への関心が高まっていることを踏まえて、高齢者を対象に様々なアンケートが実施されております。例えば、総務庁が平成9年に実施した「高齢者の健康に関する意識調査」から「現在の健康状態」に関する項目を見てみますと、

良い	48.6%
普通	25.4%
良くない	26.0%

となっております。約半数の高齢者が健康だと答えているのには驚きますが、反面26%もの高齢者が良くないとも答えております。また高齢者が健康に関心をもっていることは、同調査の「健康増進に心がけていることがあるか」という質問に72.0%の高齢者が、心がけていると答えていることから十分に知ることができます。ちなみに「現在の趣味は」という項目では、

園芸、庭いじり	34.3%
テレビを見る	31.4%
旅行、ドライブ	27.9%
散歩	20.8%
手芸、茶道など	17.5%

などとなっております。残念ながら老人大学等の学習活動は3.0%と極めて低い状況です。

平成8年度の厚生白書によれば、病気になること（49.4パーセント）、介護が必要になること（49.2パーセント）が、高齢者の主要な不安だそうです。この二つに、老後の生活資金と配偶者の死、別居の孤独などを含めると、実に89.2パーセントの高齢者が何らかの不安を感じているとの結果も出ております。

年間の死亡者総数は平均して約90万人（平成9年は、913,398人）。そのうち三大成人病と言われる病気で死去された人数は、悪性新生物（癌）が275,340人、心疾患が140,076人、脳血管疾患が138,645人です。宮崎県では、死亡者総数9,752人のうち、悪性新生物によるものが2,767人、心疾患が1,436人で、脳血管疾患が1,579人となっております。いずれにせよ死亡者総数の約60パーセントが、これらの疾患によって毎年亡くなっております。とりわけ悪性新生物による死者の比率は年々高まる一方のようです。

また比較的話題に上らない数字ですが、自殺による死亡もかなりあります。平成9年の自殺者総数は、23,465人。死因の第6位にあり、老衰や肝臓病、糖尿病による死者の数より多い数となっています。深刻な不況で自殺の割合は、近年増える傾向にあると言います。特に宮崎県ではこの比率が高く、平成7年には298名で、県内総死亡者数9,846人の三パーセントにも相当します。全国第1位です。

成人病や自殺による死は、想像を絶する苦悩と痛みをともなったに違いありません。これらの痛みをともなう死が相当の不安感を抱かせるのは事実でしょう。このようなことを思うと、先に病気になること、看護が必要になることに不安を抱いている高齢者が多いのも、納得できます。

しかし現実には老いて病気になり、介護が必要になれば、種々の環境の整備もさることながら、自分が老いること、また死に絶えることへの不安も出てくるはずで、人間が最終的に直視しなければならない不安とは、まさにこのような死に対する不安ではないでしょうか。そしてこれをどう克服するかということがまさに人生の大きな課題であります。これは、たとえどのように環境が整備されても、それによって解決できる問題ではありません。もっとも「死は恐いですか」というようなアンケートにはお目にかかったことはありませんが、特殊な事情がない限り誰しも不安を抱くのは当然だからです。しかし老いるということは、病気や介護への不安に加えて、迫りくる老いや死

を実感することでもあります。私はまだ老いや死を実感する年齢ではありませんが、四十も半ばを過ぎれば薄々感じ取れる年齢ではあります。

Ⅱ 老いと死の実感

ところで老いという言葉聞くといつも二人の人物が私の脳裏をかすめます。一人は、昔博多の聖福寺におられた仙崖和尚(1750-1837)という奇僧です。死に際に「死にたくない、死にたくない」と言ってなくなられたお坊さんです。もう一人は、『徒然草』を書いた吉田兼行です。

仙崖和尚についてはよく存じませんが、なぜかその歌には、未だ老いにも至っていない私の心に言い知れないおかしみと悲哀を感じさせます。非常に有名ですのご存じの方も多いかもしれませんが、いくつか紹介しておきます。

しわがよる ほくろができる 腰まがる 頭は禿げる ひげ白くなる

手はふるう 足はひょろつく 歯は抜ける 耳は聞こえず 目はうとくなる

聞きたがる 死にともながる 淋しがる 心はまがる 欲深くなる

くどくなる 短気になる ぐちになる 出しゃばりたがる 世話やきたがる

またしても 同じ話に 孫ほめる 達者自慢に 人はいやがる

全ての人がこの歌のようになるとは限りませんが、何とも可笑しくて悲しい歌なことでしょうか。蛇足ですが、このおかしみは、「泣きながら良い方を選ぶ形見分け」にいくらか似たところがあります。

もう一人の吉田兼行については、やはり『徒然草』の一節が思い起こされます。

「この世は、無常であるのがよいのである。この世の生き物を見るに、人間ほど寿命が長いものはない。＜中略＞つくづくと一年を暮らす間だけでも、この上なくのどかなものだ。あかず名残り惜しいと思えば、千年を過ごしても、一夜の夢のような気がするであろう。住みおおせぬこの世で、醜い老衰の己が姿に出会って、何になろうか。命長ければ恥多し。せいぜい長くても、四十に足りないほどで死ぬのが、見苦しくないというものであろう。その年配を過ぎてしまうと、恥知らずの醜い姿で人中（ひとなか）へ出しゃばろうと思い、夕日の傾きかけたようなよい年をして、子や孫をかわいがって、繁栄する将来を見届けるまでの寿命をほしがり、むやみに俗欲を貪る心ばかりが深く、もののあわれも解しないようになってしまうのは、まったく情けないことである」

「命長ければ恥多し」とか「四十に足りないほどに死ぬのが見苦しくない」という言葉を初めて

聞いた高校時代には、確かにそうだと納得したことを覚えております。しかし現在では、ちょっと待ってくれよと言いたい気分を押さえることができません。兼行がこれを書いた年齢は五十八歳だと言われているので、自戒の念があったのかも知れませんが、それにしても余りにあけすけな表現が気になります。

人間は齢を重ねるに従って、それまではそう突き詰めることもなかった死への想いが徐々に深くなってきます。毎日のようにニュースでは事故か何かで死者が出たことを伝えていますが、そのようなニュースなどにも若い頃には感じなかったような悲しみを感じるが多くなります。また同窓会などの訃報欄にも同期の人間の名が散見し出し、周囲の親戚や親兄弟の死に出会ったりしだすと、これまでは他人事のように思っていた死が、比較的身近に迫ってきていることをふと実感する場合があります。自分もそろそろそのような年齢に近づいてきたのかと一抹の不安感を抱いたりもしますが、しばらくするとそのような不安感も消えてしまい、また日常の生活に戻ってしまうのが一般的でしょう。おそらく健康に生きるには、死などあまり考えずに過ごすのが一番だと身体自身が自己防衛しているのかもしれない。

しかしたとえ身体が自己防衛をしても、あるいは意識して死を考えないようにしていても、結局は、一人一人が対面で死に面するときが必ず来ます。原始仏典の一つ『スッタニパータ』には「一人ずつ死へと連れ去られる様子が次のように語られております。

「若い人も壮年の人も、愚者も賢者も、すべて死に屈してしまう。すべての者は必ず死に至る。彼らは死に捕らえられてあの世に行くが、父もその子を見守らず、親族も親族を見守らない。見よ、見守っている親族が留めどもなく悲嘆に暮れているのに、人は屠所に引かれる牛のように、一人ずつ連れ去られる」と。

賢明であれば、永遠に生きられるとか、若ければ絶対に死なないとか、子供は親より長生きできるとか、努力すれば死なずに済むとかということが全くない世界。それがすべての人が必ず死ぬという世界です。しかし誰にでも公平に、かつ絶対的に起こる世界というのは、普段の生活ではありえないことです。日常の生活では、努力すれば報われることが沢山あります。もちろん全ての努力が必ず報われるというわけではありませんが、努力に応じて可能性が高くなるのは否定できません。コツコツ貯めればひとかどの金銭も貯えることができるでしょう。ほとんどのことが努力や精進に比例して高くなります。とかく批判の多い入学試験も、人間関係や付き合いによって左右されないという意味では、社会に出てからの競争よりはるかに純粋なものです。

しかしこの日常の世界からあの世の世界に移る際には、このようなことの一切が無に帰するよう感じられます。努力しても死ぬ人は死ぬし、健康に気をつけてジョギングや散歩をしたからといって必ずしも長生きできるとは限りません。かえって無理が生じて早死にすることもあります。よくてもせいぜい数年寿命が延びる程度で、死なずに済むことはありません。死は、最終的にはあらゆる努力や精進を無視して完遂されます。パスカルはこのような最後を次のように表現しました。

「この劇は、他の部分ではどんなに美しくても、最後的一幕は血みどろなのだ。最後には、頭から土をかぶされて、それでもう一巻の終わりである」＜『パンセ』＞。

実に端的な言葉です。しかしこのような容赦のない事実が肌身に痛切に感じられればよいのですが、人間の悲しい性といいますか、重篤な病人や特殊な状況下にある人間以外、普段はこの事実がよく見えないようになっております。だからこそある意味では呑気に生きて行けるのかもしれませんが。しかしこの世には、どうしても死に直面して生きなければならない人々も沢山おられます。先に具体的な数字を出したような末期がん患者や他の重篤な病状にある人々、もっと直接的には死刑囚などです。またその他の不治の病と言われる病気もなお多々存在します。それらの人々は、普段の生活がそのまま死に面した生活となっているはずです。

死刑囚は鉢植えや金魚などを飼っているケースがあると聞きます。彼らは花に水をやる自分がいればこそ、花が生きていられることを自分の生きがいにすると言われます。自分の粗末な命でも、その命がなければ花は枯れ、金魚は死んでしまいます。寄る辺のない死刑囚が唯一自分の生命に意味を見いだせるのはそのような瞬間なのだそうです。

しかし死が必ず全ての人に否応なくやって来るという意味では、生き物は程度の差こそあれ、実質的にはすべて死刑囚と同じではないでしょうか。死期が死刑囚ほど予期できないというだけに過ぎません。遅かれ早かれ、死は間違いなくやって来ます。どれほど誤魔化そうとしても、どれほど逃げようとしても、とうてい誤魔化しきれものでもないし、逃げおおせるものでもありません。生きることが同時に死につつあること、それをある程度感じる年齢も老いの一つでしょう。子供の場合には生きることが同時に大きくなること、成長することを意味しましたが、成長が止まり、ある一定の年齢になると、一転して老化現象と言われだします。同じように生きているつもりでも、知らぬ間に成長が老化に反転してしまうのです。そして平安初期の歌人在原業平(825-880)ではないですが、突然のように

「ついにゆく道とはかねてききしかどきのう今日とは思わざりしを」

などと思う日が訪れます。その時に至ってようやく自らの最後に腹を括らざるをえなくなります。兼行も死が背後から迫ってくるものだとして次のように述べております。

「木の葉が落ちるのも、木の葉が落ちた後で、新芽が出て来るわけではない。下から芽がきざし、みごもって来るのに堪え切れないで、葉が落ちるのだ。迎え入れる気配が下に待ち受けているので、交代の順序がはなはだ早くいくのである。生老病死が速やかにめぐって来ることは、この四季の変化以上である。四季にはまだ決まった順序があるからよいが、人間の死期(しご)は、順序を待たない。死は必ずしも前から来るとは限らない。かねてから背後に迫っている。人間は誰も皆、死のあることを知りながら、予期する気持ちがまだ切羽詰まっていないうちに、思いがけなくやって来る」＜百五十五段＞。

また兼行は、七十四段ではこうも述べております。

「蟻のように集まって、東西に急ぎ、南北に走る人間たち。身分の高い者もあり、いやしい者もある。年老いた者もあれば、若い者もある。めいめい行く所があり、皆帰る家がある。夕

べに寝ては朝（あした）に起きる。一体全体、人間のやっていることは何なのか。生を貪り、利を求めて、やむ時もない。身体（からだ）を養って何を期待するのか。待ちもうけるものは、ただ老と死とだけである。この二つのものが来るのは急速で、ちょっとした間もとまらない。これを待っている間、何の楽しみがあろうか。迷っている者はこれを恐れない。名利に目が眩んで死の瀬戸際が迫っているのを考えないからだ。愚かな者は、死期（しご）が迫っていることを悲しむ。いつまでも生きたいと願って、万物は変化するものだという理法を知らないからである」

いずれも人生に猶予のないこと、このひとときを何より大切に生きることを求めています。無常を悟り、無益な名利に追い回されることなく、背後から迫り来る死に思いをいたせというのです。死の突発性を思って生の充実を図るというのは誰しもが口にするわけですが、それだけにいっそう実行が困難な事柄でもあります。孔子は、子路に死の道を聞かれてこのように述べました。

「未だ生を知らず、焉んぞ死を知らんや」（『論語』先進編）と。

生の意味がまだ分かりもしないのに、死のことなど分かるはずもないとにべもない返事です。孔子は非常に合理的な思考の持ち主ですので、現に経験しているこの生についても十分には分からないのに、まして誰も経験したことのない死については、それを云々しても始まらないと考えるわけです。死人に口なしとはよく言ったものです。世間でよく臨死体験が語られますが、それは飽くまでも臨死であって、死の体験ではありません。死んだ人間は二度とこの世に戻ることはありません。確かに死に掛けたことは事実でしょう。しかし死んでいなかったことも事実です。トンネルの彼方に光が見える経験が比較的共通した経験だそうですが、実際のところはやはり死んでみないと分からないだろうと思っています。もっとも植物状態にある人や脳死状態にある人でも、聴覚は最後まで残ると言われています。場合によっては、医者「ご臨終です」という言葉を聞きながら、無念な思いで死ぬことがあるかもしれません。数年前話題になった永六助さんの『大往生』には、逆に自分自身で「ご臨終です」と言って亡くなられた人のことが書かれてありました。何とも愛敬のある死に方だと思わず笑ってしまいました。私にもこのような死に方ができればと思っていますがどうでしょうか。

Ⅲ 死の9つの恐怖

しかし一体死の何が具体的に恐怖心を起こさせるのでしょうか。上智大学で長年「死学」を講じ、自らも癌から生還されたデーケン先生が、この恐怖心を九つの項目にうまく纏めておられます。それによりますと、

(1) 苦痛への恐怖

これは肉体的な苦痛だけでなく、家族への別離を含む精神的な苦痛を含みます。

(2) 孤独への恐怖

これは一人で死を迎えなければならない恐怖。

(3) 不愉快な体験への恐怖—尊厳を失うことへの恐れ

これは、病院で受ける種々の不愉快な治療や自分自身の取り乱し、および見舞客にやつれた姿を見せたくないという恐怖

(4) 家族や社会の負担になることへの恐れ

他人に迷惑をかけないことが美德とされる日本では、家族の重荷になることが、患者自身にかなり負担をかけている。

(5) 未知なるものを前にしての不安

これは死そのものの正体の不明さから来る恐怖。

(6) 人生に対する不満と結びついた死への不安

社会的な不適応や挫折を重ねるうちに、人生を素直に肯定できなくなり、周囲の環境全てに恨みや恐れを持つ人が抱く恐怖。

(7) 人生が不完全なままに終わる恐怖

自分の中の可能性が十分に発揮できないまま終わることへの無念さから来る恐怖。

(8) 自己が消滅することへの恐怖

死が全ての終わりだと思える恐怖。

(9) 死後の審判や罰に対する不安

これはキリスト教的な不安感で、日本人には余り馴染みのない不安感でしょう。

キリスト教徒のデーケン先生には、最後の9番目が痛切な恐怖だろうと思われていますが、これは、一般の日本人には余り馴染みのない恐怖です。これを除けば、確かにもっともな意見です。ただ最終的にはどうかと考えますと、(7)と(8)に挙げた項目、つまり人生が不完全に終わること、および自己消滅の恐怖が最も大きなものと言えるでしょう。まだやり残しているという思いや、自分がこの世から消えてなくなるという思いには、どうしようもない恐怖を感じます。

デーケン先生は、このような不安を完全に取り除くのは不可能なことだとしながらも、死に対する過剰な恐怖は、死への準備教育を徹底すること、死に臨んでもユーモアと笑いを忘れないこと、死後にも永遠の生命が待っていること、この三つによってかなり恐怖心を克服することができると述べておられます。しかし私はクリスチャンではありませんので、最終的には死後の生を信じて安らぎを得ることはできません。死は終末ではなく新たな生の始まりだと言われても、どうにも納得できないのです。ゲーテは、「来世に希望を持たぬ人は、この世で既に死んでいるようなもの」だと言っているそうですが、死は一体どのような生の始まりなのでしょう。そう自問しはじめると、デーケン先生やゲーテのような考え方では、心の平安を得ることが困難になってくるのです。

IV 死の恐怖の克服

エピクロス、ソクラテス、兼行の場合

ところで昔の哲学者たちは、不完全なまま人生が終わることへの恐怖心や自己消滅の恐怖心を、如何にして乗り越えようとしたのでしょうか。紀元前四世紀の古代ギリシャに生きた快樂主義を唱える哲学者エピクロスは、

「我々が存在するかぎり、死は現に存在せず、死が現に存在するときには、もはや我々は存在しない。そこで、死は、生きている者にも、既に死んだ者にも、かわりがない。なぜなら生きている者のところには、死は現に存在しないのであり、他方、死んだ者はもはや存在しないからである」(『エピクロス』岩波文庫pp.67-68)

というようなことを述べております。要するに、死は何でもない事だという考え方に慣れろと言うのです。もちろん、迫り来る死の恐怖心が人間を不安にさせるのだと言う人もいるでしょう。もっともな意見ですが、エピクロスはそのような考え方に、こう応えております。

「やがて来るものとして今我々を悩ましているがゆえに、恐ろしいのだと言う人は愚かである。なぜなら現に存在するとき我々を煩わすことのないものは、予期されることによって我々を悩ますとしても、何の根拠もなしに悩ましているに過ぎないからである」と。

エピクロスにとっては生きているということだけが事実なのです。だから「死は我々にとってもっとも恐ろしいものとされているが、実は何ものでもない」というのです。生きているとは死んでいないこと。死んでしまえば死んだことすら分からないのだから、そのような死などに不安を抱いたり、悩まされたりせず、現に生きている今を存分に享受せよと。彼は死に臨んでイドメネウスに手紙を書き送っております。

「生涯のこの祝福された日に、そして同時にその終わりとなる日に、私は君にこの手紙を書く。尿道や腹の病（赤痢）は非常に重くて、これほどの痛みはないだろうと思うが、君とこれまでに交わした対話の思い出に心は満たされている」。

「過ぎた日の善いものごとを忘れ去れば、その人は、まさにその日に、老いばれる」と語っていたエピクロスに相応しい最後の言葉です。過去の素晴らしい思い出を脳裏に浮かべながら、彼は激痛に耐えて死んで行きました。しかし生だけが全てであって、死に対する恐怖は根拠のない恐怖だと言われても、凡人にはなかなかそのように割り切ることができません。また過去の思い出というのも、人それぞれですから、思い出して慰められるような過去ばかりであるとは限りません。むしろ思い出したくないことの方が多いでしょう。私には、あるのは生だけだと言ひ聞かせ、過去の記憶を懐かしんで、平静に死ねるとは思えません。

古代ギリシャには、もっと有名が哲学者がおります。「青年に毒害を与え、国の認める神々を認めない」という罪で、有罪判決を受けたソクラテスです。彼は結局、悪法も法だという信念から法の判決に即して毒盃を仰ぎました。ソクラテス自身は何も書き残しておりませんが、弟子のプラトンがソクラテスを主人公にした対話編を数多く残しております。その一つに『ソクラテスの弁明』があります。その対話編の中で、ソクラテスは、死に対する恐怖心についてこのようなことを述べております。

「死を恐れるということは、知恵がないのにあると思っていることに他ならないのです。な

ぜなら、それは知らないことを知っていると思うことだからです。死を知っている者など誰もいないのですから」と。

本当の知者は、自分が無知であることを知る者のことであって、知りもしない死について決して知ったかぶりに言うことはありません。無知を自覚するのが知者だからです。それを無知の知と言いますが、死を忌み嫌う根拠も、知らないことを知っているかのように忌み嫌うわけですから、まさに無知の知の自覚がないわけです。ソクラテスは、死はもっと良いものかもしれないと言って、従容として弟子たちの前で毒盃を仰いで死んだのです。

エピクロスは、死は生きているあいだは存在しないものだし、死んでしまえばもう生きていなし、そもそも感覚がないのだから、死など恐れるに足りないと言い放ちました。そして死は最も厭うべきものとだと思われているが、それは生きている人間には全くなんの関りもないものと割り切りました。一方、ソクラテスは、魂が肉体の束縛から開放され、真に自由な魂になれるという意味で、死はあるいはそう思われているよりもっと善いものかもしれないと言って死にました。

現に経験できないような死など恐れるに足りないと考えるのは、理屈ではそう思えても、どうしても何か騙されているような感じを受けます。またソクラテスのように、魂の不死を信じ、更には死はもっと善いものかもしれないと考えるのも、結局、分からないことを分かった風に言っているに過ぎません。結局のところ、誰も死んで帰ってきた者がおりませんから、本当のところは死んでみないと分からないと考えるのが常識的な判断でしょう。もっとも死んでしまったら何も分からないとは思いますが…、

デーケン先生やソクラテスのように、死後にも何らかの形で新たな生命が始まると考えるのは、西洋の伝統的な考え方ですが、現世の姿のままで再び人生を享受できるわけではありません。魂というようなとりとめもない形で生きられると言われても、私にはどうもうまく合点がいかないのです。また先に挙げた兼行法師は、衣・食・住と薬の4つがあれば、人生はよしとしなければならないと言ったりもしておりますが（百二十三段）、結局は、

「世俗のかかりあいを離れて、身を静かにし、俗事にたずさわらないで、心を安らかにすることこそ、仮に楽しむと言ってもよかろう」＜七十五段＞

と述べ、門を閉ざして一人静かに故人たちの著作を読みながら暮らせれば幸いだということです。兼行には、曖昧な魂などを引き合いに出して、あの世や極楽で、永遠の生命にあずかるという考え方は見られません。その意味では非常に合理的な考え方です。しかしそれは、余りにも孤独な生き方のように思えます。これが、日本の知識人が理想とした生き方ではありましたが、私には、彼のように孤独のうちに生きることには心の安らぎ、心の平安が感じられないのです。

V 救い

エピクロスのように理屈で死の不安を乗り越えることも、ソクラテスのように死を肉体の束縛からの開放だと喜ぶことも、更には兼行のようにあの世を語らずただ現実の生を孤独に生き通すこと

も、私にはできません。できれば兼行の合理的な考え方を受け継ぎながら、なおかつ彼の孤独感を充実したものにしたい。心の平安を孤独のうちに閉じたものではなく、開放されたものにしたい。それが実現できれば、本当の意味での心の平安、つまり救いが得られるのではないのでしょうか。言うまでもありませんが、私の言う心の平安とは、決してあの世を信じて安らぎを得る平安ではありません。現に生きているこの世を唯一の生と考え、この世の生を満足して終えるという意味での心の平安です。

一体どのような考え方をすれば、このような平安が得られるのでしょうか。死後の世界を信じないわけですから、まず伝統的な宗教が主張してきたような天国やあの世の存在を否定しなければなりません。そして次に少し抽象的ですが時間に対する考え方を変えてみる必要があります。

一般に宗教は、キリスト教や仏教であろうと、何らかの形で死後の生について語ってきました。確かにあの世や天国を信じて多くの人々が心の安らぎを得てきたことは事実です。それに本当に満足を感じている人々に、それを信じることをやめるべきだということではありません。特定の宗教を信じて満足感が得られるなら、それはそれでいいと思います。しかし天国やあの世を素朴に信じられない人々もいるはずで。このような人々は、一体、人生の最後に何を思い感じるのでしょうか。宗教も神も信じない人々は、一般に、刹那主義的か、悲観的かのいずれかの人生観を採るのが普通です。どうせ死んでしまえば何も存在しなくなるのだから、難しいことは何も考えず、ただその日その日を楽しく生きられればいいと考えるか、あるいは神のような絶対者を信じられないために、兼行のような孤独のうちに心の平安を見いだすかの、いずれかだと思われます。

しかしそのような人々でも、自分が誰にも知られず、誰にも記憶されないで死んでしまうのかと思うと、おそらく一抹の不安を感じるに違いありません。白居易ではないですが、「人間、酔わねば愁うるしかない」という心境も十分に理解できます。だから普通は、親族や知人が自分を記憶してくれることに期待をかけるわけです。しかし人間の記憶など実に儚いものです。正確でもなければ、長続きもしません。せいぜい子供や孫を入れても死後百年も経てば、完全に忘れ去られているに違いありません。もっとも一部の著名人は更に長く記憶される可能性はありますが、それも、いずれは忘れ去られる運命にあります。

特に宗教を信じているわけではないけれど、かと言って、限りある人生を、仕事や娯楽だけで終わらせたくないと考えている人々、また多忙の中に人生の充実を感じるだけで、一度きりの人生の意味を問いただす機会をもてない人々。そのような人々にこそ、私は伝えたいのです。たとえあの世や天国を信じなくても、刹那主義的にも、悲観主義的にもならず済む考え方があると。この考え方を取れば、魂の不死という曖昧な事柄も信じる必要がなく、しかも心の平安も得られるのです。

それにはまず時間の観念を少し見直す必要があります。時間について理論的に語るのは大変難しいのですが、一般の人々が常識的に感じている時間というのは、過去は既に過ぎ去った時間、未来は未だ到来していない時間、現在は捉え切れずに絶えず離れ去る一瞬のひと時ように思えます。そして普通は、この現在だけが経験できる時間だとして、過去や未来を次のように考えるわけです。つまり過去は現在の私の記憶の中にしか存在しないもの、未来は現在の私の期待や予期のうちにしか存在しないものだ。これが時間の一般的なイメージでしょう。存在すると言い切れるのは、現在だけだという主張です。このイメージをすべて否定するつもりはありませんが、過去と現在については、いくらか違った風に考えることができます。

確かに過去は記憶にしか存在しないというのは、一面では真実なのですが、過去にはもう一つの側面があります。分かりやすい例を挙げれば、太陽や夜空の星を見ているような場合です。光には承知のように、伝わる速さに上限があります。太陽の場合だと、その光はおよそ8分ぐらいかかって地球に到達します。ということは、今見ている太陽は、実際には8分前の太陽の状態だということになります。しかしそれを見ているのは、先の時間区分で言えば現在です。星に至っては、何億年もかかって地球に到達しますから、もう既に存在していない星を見ている場合もあるはずです。しかしいずれにせよ、見ているのは現在です。すべてのものは、受けた光を反射させてその存在が認知されます。目の前にある机も鉛筆も、すべてあつた光を反射させて、私たちの目にその姿形を届けてくれるわけです。そして言うまでもありませんが、光に反射されて対象が目が届くまでには、たとえわずかでも時間がかかっています。つまり星の光ほど極端な時間のずれはないにしても、身近に存在する全てのものも同じように、厳密には過去のものとして知覚されるわけです。

結局、ものを見るとは、過去を見ることなのです。日常何気なく見ている全てのものが、このように過去にあつたものとして知覚されるのだという考え方が許されるなら、一般に解釈されているように、過去は既に存在しないという観念は、一面の真理でしかないことが分かってもらえるはずです。確かに既に過ぎ去ってしまった過去は、少年時代の思い出がそうであるように、記憶の中にしか存在しません。しかし過去には今見てきたように、現在と密接に関連するような過去も存在するのです。過去も現在として存在するというのは、このような意味です。そして全ての知覚が過去の知覚だとすれば、現在のことと普通に思っていることは、結局は、過去のことだということになります。一瞬たりとも留まらない現在とは、この理論から言いますと、まったく知り得ないものなのです。なぜ知り得ないのかと言えば、それらは絶えず生成される過程にあつて、まだ事実になっていないからです。過去になるとは、変えられないものとなること。つまり事実として不変的な事項になることを意味します。私たちは、既に生成し終わった事実しか知ることはできません。生きるとは、既に事実となった過去を知覚しながら、同時に絶えず生成過程にある現在をその都度、事実に変えていくこと、つまり何かを感じ生み出すことなのです。過去だけが事実だとすれば、現在とはまさに形成されつつあるものに他ならないからです。

もしこのように過去だけが事実だとすれば、この事実は、当然、永遠に不変なものでなければなりません。過去の歴史は変えられないからこそ、事実だと言えるのです。もし歴史と同じように個人の人生を一つの歴史に喩えるなら、それもまた不変なものです。自分の過去は、妄想でも抱かない限り変えることはできません。そうだとすれば、次にはそのような過去を完全に知覚し、記憶するような存在がいて欲しくなります。なぜなら不変的な事実だと言ってみても、それを記憶するものがない事実など、何の意味もないからです。人間のような儚く、不正確な記憶としてではなく、完璧な記憶、完璧な知覚として、全ての生き物の行為を覚えてくれるような或るものが、どうしてもいてほしくなります。私には、そのような存在がいるように思えてなりません。もっとも必要だから存在するとは言えませんので、このようなものが存在することは、別に証明する必要がありそうですが、今は、ただ事実は不変的だと言っても、それを認識するものがない限り事実としての意味がなくなるということだけを言っておきます。歴史的事実というものも、それを認識する人間がいてこそその事実でしかありません。とにかく、このような存在を認めれば、それを神と呼ぼうが、永遠の生命と呼ぼうが、ブッダと呼ぼうが、どうでもよいことなのです。とにかく強欲かもし

れませんが、私は、自分が生きてきた過去の全てを、つまり全ての事実を、完璧かつ永遠に記憶し、知覚しておいてほしいのです。このようなことを望むのは、確かに傲慢かもしれませんが、あの世を信じて永遠に生きることを願うよりも、これまでにおこなったことの全てが事実として永遠に残り、かつ記憶されるという方が、はるかに合理的で自然な考え方だと、私には思われます。もっとも、すべてが事実として残り、記憶されるというのは、少し恐ろしい気もしますが、その恐ろしさから来る責任は受け入れるしかありません。

不滅なものが自分の過去の全てを事実のままに完璧に記憶してくれる。それだけで、たとえ自分がこの世から消滅しても、永遠の命にあずかれるはずです。このように考えれば、生きたことの意味もおのずと違ってくるのではないのでしょうか。救いとは、このような存在が私を永遠に記憶してくれると信じるころから生じる心の平安です。これは、兼行のような孤独に甘んじた人生観とは異なります。もっと遥かに大きなものへ心を開放し、自分も生きながら絶えずその生命体の記憶の一部になりつつあることを自覚することです。私は、そのような存在を信じてみたいと思っています。そしてできれば、そのようなものによって完全に記憶されるというのなら、できるだけその記憶を善いものにしたいと思うのは当然でしょう。既に終わったことを変えることはできませんし、記憶されてしまったことに変更はききませんが、これから記憶される事柄を善いものにすることは可能です。人間の努めは、そのような存在の記憶の中身をより善いものにすることにあるのではないかと考えております。もっとも、そうは思ってもなかなかそのようにはできないのが人間の常でしょうが、私は、そのような拙い人間をも包み込んでくれるものが、本当の創造者だと都合のいいように考えております。

生きることは、創造することです。しかし創造するというのは、何も芸術家や作家や建築家になって何かを創造するという意味ではありませんし、神だけが創造できるものでもありません。確かにそれらは、何かを実際に生み出しているという意味では創造行為には違いありませんが、全ての人ができるものではありません。ここで言う創造とは、全ての人等しくできる創造行為のことです。そのようなものなどあるのかと言われそうですが、確かにあります。それは、種々の対象を見て、自分なりに何かを感じ、考えること。自分独自の感情や思考を抱くこと、これもれっきとした創造行為です。何を見てもおそらく人と同じ感情を抱くことはないはずですが、たとえまったく同じ状況にあっても、感じ方や考え方は異なります。このような意味では、何かを自分なりに感じ取ることも一つの創造と言えます。自分以外の誰かが感じたことのないもの、経験したことのない感じ抱くことは、とりもなおさず創造に他なりません。このように解釈すれば、寝たきりになっても創造することは可能です。モーツアルトを聴いて何かを感じ取ること、本を読んで何かを考えること、花木を見て抱く種々の感情も、全て自分独自の創造行為なのです。目が見えず、体が動かせなくとも、耳が聞こえるなら、その耳で感じ取る音楽は、自分にしか感じ取れない世界を生み出しているはずですが。

死後の生を考えなくても、魂の不死を考えなくても、生きてきた自分の過去を全て完璧に記憶してくれる存在がいるとすれば、永遠の命にあずかることはできます。しかしこれからくる未来のことは、そのような存在にとってもどうなるかわかりません。なぜなら、まだそれは事実となっていないからです。事実になっていない限り正しい認識はできません。神にも未来のことなど分かるはずがないのです。それでこそ人間に本当の意味での創造行為が与えられるのです。生きるとは、創

造することです。それは、自分なりに感じ、考えること。人間は自由であり、かつ創造することもできるのです。そしてこうして生きた人間の過去が、生きているときは言うまでもなく、死んだ後までも永遠に記憶され続けるのです。これは非常に合理的な考え方だと、私には思えますがどうでしょうか。

[2000年11月30日 受理]